

---

# 2度目の恋

桜咲 優莉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

2 度目の恋

### 【Nコード】

N4588H

### 【作者名】

桜咲 優莉

### 【あらすじ】

5年前好きだった人。その人のことはもう諦めたはずなのに…。

## 前編

7月21日。

この日私は20歳になった。

あれから約5年。

私は小6から中3まで好きな人がいた。

その人の名前は藤山裕太。

家も近くで仲の良い男友達だった。

そういえばあいつ、どうしているかな…。

ふと目の前にあった卒アルを手にした。

ペラッ。

どの写真も懐かしいものばかりだった…。

藤山と会いたいなあ……。

数カ月後。成人式がある。

藤山に会えるかな……？

私はあれから本気で人を好きになったことがない。

もちろん誰かと付き合っていたりしていたが

藤山以上に好きになれなくて長続きはしなかった。

何でだろう……。別に特別な人だった訳ではないのに……。

藤山、もしかしたら彼女いるかも……。

まあそれでも祝福できる……と思う。

成人式　　。

少し肌寒い日だった。

「梨那く久しぶり!!」

会場に着くとたくさんの友達に声をかけられた。

「あつ、麗ちゃん!」

私は人ごみの中から中3のころ藤山と同じクラスだった友達を見つけた。

「梨那、元気にしてた〜？綺麗になつたね！」

「麗ちゃんこそ！ほんと変わってないね〜」

懐かしい中学の日々の思い出話をしながら歩いていた。

「あつ藤！久しぶり」

「お〜」

後ろから声がした。

私の体はその声に反応をし  
脳が理解する前に振り向いていた。

「…藤山……？」

「お前、梶…？」

私はまた恋をする

。

## 中編

「ほら李那。早く行くよ!」

「うん!」

私は麗ちゃんに呼ばれその場を離れた。

式の最中も私の頭の中は藤山のことばいっばいだった。

背、高くなってたな…。

一瞬藤山ってわからなかった…。

式が終わり、私は帰ろうとしていた。

「梶じゃん!」

名前を呼ばれ振り返ると同じ部活だった男子達がいた。

「これから部活の奴等と飲みに行こうと思うけど一緒に来る?」

「もちろん行くよ」

それから数人の女子も誘って飲みに行った。

「わ〜みんな変わったねえ」

私はわいわいと騒いでいた。

ドカッ

隣を見ると藤山が座っていた。

「よお…梶、久しぶり」

「藤山も〜!一瞬分らなかったよ」

「男前になつた？」

「調子乗るな!!」

なんて昔と同じように話していた。

懐かしい……。

まさか会えると思わなかった。

「彼女いる？」

「この間別れた……」

「うわ〜どんまい!」

「そっちは??」

「彼氏いない歴10ヶ月」

「お互い悲しいな……」

彼女がいないと聞いて心の奥では喜んでる自分がいた。  
もう諦めたつもりなんだけどな……。

「なあ梶。 2人で抜け出してどっか行かない？」

「うん！いいよ」

すると藤山が向こうにいる男子のところに行き何か言っていた。

「さあ行くか」

藤山は私の手を引き、店を出て行った。

嘘～～！

いきなり急展開だよ！！

## 後編

「ん〜気持ち〜」

外を出ると藤山はのんびりと言った。  
こういうところは変わってない…

「本当梶って分からなかった〜」

「そんなに私変わったかなあ〜」

「うん、綺麗になった」

「…ありがとう…」

あまりにも藤山が穏やかに笑うものだからドキッとした。

あつ私この人のことまだ好きだ……。  
ふとそう思った。

「梶、今恋してる？」

いきなり質問をしてきた。

「ん〜そうかも…」

素直に答えられた。  
誰と付き合っていても忘れられなかった人。  
それが藤山。

「ねえ藤山」

「何？」

「私8年間その人の事好きだったのかも」

「ふん…」

藤山が優しいので止まらなくなった。

「誰と付き合っても」

誰に告白されても

ずっとその人のことは忘れられなかった」

涙が溢れてきた。

何でか分からないけど止まらなかった。

しばらく経つと藤山が口を開いた。

「家まで送っていくよ」

藤山はやっぱり優しかった。

それから私の家まで藤山はさっきの話題に触れなかった。

それがなんだか有り難かった。

「じゃ梶。これからも元気でな。もう会わないかもしれないけど……」

そう言うと藤山は歩き出した。

「っ藤山ー!!」

「？」

私は藤山を呼び止めた。

不思議そうな顔をする藤山。

「あのね！私の好きな人はね、藤山なの！！」

無意識のうちに言葉にしていた。

## 後編（後書き）

中途半端な終わり方になってしまいました。  
この結末は読書様の想像にお任せします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4588h/>

---

2度目の恋

2010年10月16日00時30分発行